鈴旭小第７９１号
２０２５年3月１１日
学校名　旭が丘小学校
学校長名　楠田　謙治

校内研究実施報告書

１ 研究主題について

研究主題	生きて働く言葉の力の育成 ～向き合う　味わう　楽しむ～
教科・領域	国語科・領域全般

２ 研究の経過

昨年度から教科を国語科とし、表現する必然性を生み出す単元計画の探究として、考えを形成するための選択場面の設定を工夫し、選択のさせ方や選択させる項目の設定などを実践・検討してきた。その結果、選択場面を設定することで自分の考えをもつことができる児童が増えた。しかし、思いや考えをもつことには個人差が見られ、その思いや考えを自分の言葉でまとめ、伝えることについてはまだまだ弱いといった課題も見られた。そこで、今年度は、自分の言葉で思いや考えを適切に表現し、豊かに伝え合える力の向上、また「国語が好き」と思える児童の育成を目指し、研究・研修を進めてきた。

児童の表現力を確かなものにしていくためには、情報の収集・整理・分析といった情報活用能力の向上が必要である。自分の考えをまとめ、自分の言葉で適切に表現するためにＩＣＴや思考ツールを活用し、自分の考えを具体化できるような取組を行った。また、豊かに伝え合うために、話し方や聞き方のスキルや語彙力が必要であることから、言い換え図鑑や詩の活用など、各学年の現状に応じて語彙や表現を獲得していく取組を通年で行ってきた。そして、児童同士の学び合いを大切にし、一人でも多くの児童が「国語が好き」と思える授業づくりを目指してきた。これらの「授業展開の工夫」「語彙や表現の獲得」「主体的な学び」を研究・研修の主な柱として日々の実践に取り組み、その効果を検証してきた。

その結果、何を目的とした学習活動なのかを明確にすることで、その目的に向かって自分自身が学びたい問いや疑問を追究したり、必要な情報を探し、整理するためにＩＣＴやツールを活用したりして、自ら学ぼうとする児童の姿が見られるようになってきた。さらに、高学年では指示を待って動くのではなく、課題を達成するために児童同士で学び合おうとする姿が自然と見られるようになってきた。児童主体の授業を教員一人ひとりが意識してきたことで少しずつ児童の姿に変化が見られてきたのだと考える。また、語彙や表現の獲得を目的として学年に応じた「オリジナル国語辞典」や「言い換え図鑑」、「きもちずかん」などの取組を行ったことで、言葉を知り、意味を調べ、それらの言葉をどのように使うのかを考える機会をつくることができた。文章を書く時には、それらの言葉を使おうとしたり、「たのしい」「うれしい」ではなく、言い換えようとしたりする児童の姿も見られた。これらの取組を通して、言葉を知る機会をより多く作り出すことができたことは、児童の語彙を増やすことにつながっており、研究主題の副題にある「向き合う　味わう　楽しむ」の第一段階である「言葉と向き合う」ことは達成できたと考える。

しかし、児童の姿から自分の言葉で思いや考えを適切に表現し、豊かに伝え合えるといった力には、まだまだ課題が見られる。国語科での学びが「生きて働く言葉の力」として活用

されるには、今後、それぞれの児童の課題を明らかにし、活用の場を随所に作っていくこと、また、個別最適学習についても視野に入れ、研究・研修内容を検討していく必要があると考える。その上で、今年度の成果をもとに「言葉を味わう」「言葉を楽しむ」といった次への段階へステップアップしていきたい。そして、今年度、掲げた３つの柱の内容を実現していくための具体的な方策や手立て、中でも「主体的な学び」とは具体的にどのような学びで、どのような児童の姿であるのかを全教員で確認し、共通理解を図った上で系統性を整理し、来年度の研究・研修につなげていきたい。

＜年間の取組＞

一学期	４月　１日（月）研修部会　今年度の組織体制と役割分担 ４月　３日（水）研修部会　今年度の図書館教育・家庭学習等について ４月　５日（金）研修部会　今年度の研究の方向性の検討 ４月１７日（水）第１回全体研修会　今年度の研究の方向性と概要について ４月１８日（木）学力学習状況調査（６年） みえスタディ・チェック（４・５年）
	５月１０日（金）研修部会　研修実施計画の検討 ５月１５日（水）職員会議　今年度の研究について 研修実施計画の提案・検討 ５月２９日（水）研修部会 ※みえスタディ・チェックの自校採点と分析（５月１７日（金）までに）
	６月１７日（月）第２回全体研修会　モデル授業提案・事前検討会（指導教諭） ６月２４日（月）研修部会 ６月２６日（水）第３回全体研修会　モデル授業提案・事後検討会（指導教諭） ※国語科に関する児童アンケート実施
	７月　８日（月）研修部会 ７月２９日（月）研修部会
	８月　２日（金）第４回全体研修会　１学期の振り返りと２学期の取組 ※全国学力学習状況調査の結果分析 ８月２８日（水）研修部会
二学期	９月１７日（火）研修部会 ９月１８日（水）第５回全体研修会　３年生提案授業・事後検討会 ９月２６日（木）学年部研修会①　２年生提案授業・事後検討会
	１０月２２日（火）第６回全体研修会　５年生提案授業・事後検討会 １０月２８日（月）研修部会
	１１月　６日（水）学年部研修会②　４年生提案授業・事後検討会 １１月２０日（水）第７回全体研修会　１年生提案授業・事後検討会 １１月２５日（月）研修部会 １１月２８日（木）学年部研修会③　６年生提案授業・事後検討会
	１２月１２日（木）指導教諭公開授業　指導教諭提案授業・事後検討会
三学期	１月　８日（水）研修部会　２学期の振り返りと３学期の取組 １２月１６日（木）学年部研修会④　コスモス提案授業・事後検討会 １月２２日（水）職員会議　３学期の取組について １月２７日（月）みえスタディ・チェック（５年） ※みえスタディ・チェックの自校採点と分析（２月７日（金）までに） １月２７日（月）研修部会　今年度の各学年の取組の振り返り
	２月１０日（月）研修部会　今年度の研修の振り返り ２月１９日（水）第８回全体研修会　年間総括・来年度に向けて ２月２０日（木）臨時研修部会　来年度の方向性について① ２月２８日（金）臨時研修部会　来年度の方向性について②

	※国語科に関する児童アンケート実施
	３月　５日（水）研修部会　来年度の方向性について③ ３月１２日（水）職員会議　研修実施報告書の提案・検討 ※研究紀要の作成

３ 具体的な取組について

①授業展開の工夫

a) b）ＩＣＴ×思考ツールを活用した学びについて

低学年では、ＩＣＴや思考ツールを使いこなす土台形成のために、児童が自分の考えや思いを表現しやすいように、挿絵入りのワークシートや穴埋め形式のプリントを活用した。これにより、児童は登場人物の気持ちと自分の気持ちを区別して考え、物語の流れや叙述を基に登場人物の心情を理解する力をつけることができた。また、書く活動では相手に分かりやすく伝えるために文の構成を考える活動を取り入れ、高学年を見据えた情報活用能力の育成にも力を入れた。

中・高学年では、ＩＣＴや思考ツールを積極的に授業に取り入れ、児童がこれらのツールを効果的に活用できるよう指導した。さまざまなツールがある中で、それぞれの特性や使い方を理解させ、授業での実践を通してメリットとデメリットを教師と児童が共に考え、最適な活用方法を探求した。

ＩＣＴや思考ツールを効果的に活用し、児童が主体的に学ぶための方法として、個別学習、グループ学習、全体学習などさまざまな学びの形を状況に応じてを取り入れた。ペアやグループワークを行う際には、その意図や効果を児童と共有し、話し合う時間を設けることで児童が活動の目的を理解し、主体的に学ぶ姿勢を育てることができた。

高学年では、児童に単元の目標を伝え、一部の単元で学習計画を自ら立てる活動を取り入れた。また、4 年生と 6 年生では複線型の授業を導入し、児童が自身の到達目標を 3 段階のルーブリックから選択できるようにした。これにより、児童はそれぞれの時間の目標を明確に理解し、主体的に学習に取り組むことができた。個別最適な学びを実現するためは、課題解決のための探求学習のプロセス（課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現）を示した。また、スプレッドシート、ドキュメント、スライドなどのＩＣＴツールを活用することで、児童が自分のペースで学習できる環境を整えた。さらに、オクリンクプラスや Canva などのツールを用いることで、思考の可視化・共有を促進し、児童間の協働的な学びを促すことができた。

その結果、児童は、自分の思いや考えを伝えやすいワークシートを使って学習に取り組むことで、想像することの楽しさを感じられるようになった。また、物語の叙述に線を引く学習を繰り返すことで、まず文章をよく読んで考えようとする態度を育てることができた。ＩＣＴや思考ツールについても、教師の指示がなくても自分で判断して活用する児童が増え、これらのツールを使ってより深く考え、自分の考えを表現できるようになった。

複線型の授業を取り入れたことで、児童同士の教え合いや意見交換が自然に生まれ、互いに学びを深め合う姿も見られた。また、教師主導の授業から児童主導の授業へと徐々に移行したことで、授業中の児童の活動量が増加した。従来の指示待ち授業ではなく、児童が自ら考えて活動機会を増やしたことで、児童自らの学びを調整する力を養うことにつながった。

しかし、一方で課題も見られた。文章の読み取りにおいて、自分の想像に捉われすぎて叙述からずれた解釈をしてしまう児童や重要な叙述を見つけられない児童がいた。また、必要なツールを自分で判断し、使いこなせる児童は一部に限られていた。

複線型の授業や児童主導の授業において、授業についていけず、取り残されてしまう児童も一部に見られた。さらに、情報収集能力は高いものの、収集した情報を精査し、自分の考えを深めるために必要な情報を選び、まとめる力が弱い児童が多く、安易にコピー＆ペーストに頼ってしまう傾向が見られた。

これらの課題を踏まえ、今後、以下の点に重点を置いた授業改善を目指していきたい。

○ＩＣＴや思考ツールの活用能力の系統的な育成

児童が自ら考え、授業場面でＩＣＴや思考ツールを取り入れていく力を養うため、学校全体でこれらのツールの習得に関する学習モジュール活動を行い、学年の発達段階に応じた系統的な指導を行う。

○複線型授業の全校的な導入に向けた段階的な取組の検討

今年度は一部の学年でのみ導入した複線型授業を、来年度は中学年から段階的に導入し、高学年での本格的な実施につなげていく。また、低学年の段階では、将来の複線型授業の実施に向けた基礎を培っていく。低・中・高学年で連携し、系統立てた指導を行うことで、全ての児童が主体的に学習に取り組める力の育成を目指していきたい。

○情報モラル・情報リテラシー教育の充実

情報モラルや情報リテラシーに関する指導時間を増やす。特に情報の活用に関する指導内容を見直すことで、児童の情報活用能力の向上を図る。

②語彙や表現の獲得

各学年で、語彙の獲得に向けた活動が行われた。反省から、活動そのものには意欲的に取り組むものの、活用するに至っていないという実態が明らかになってきた。今年度行ってきた活動で獲得した語彙は、学習で使用するものが多く、日常生活を送る上で使用する言葉として生きていない、生かしていくことが難しい。また、計画段階で活用に対する具体案を提示することができていなかったことも原因の一つである。

今後は、獲得するための活動として効果的だった取組を継続しながら、それに加えて活用場面を増やしていきたい。

＜通年での取組＞

a）b）　言葉の宝箱の活用、「言い換え図鑑」の作成

今年度は個人での語句の蓄積の活動が多く取り入れられた。３年生からは国語辞典の使用、「気もち１００マス」の活動を通して語彙の獲得が進められた。特に１年生では「きもちずかん」４、５年生では「言いかえ図鑑」６年生では「オリジナル国語辞典」の活動を行い、年間を通して語彙の獲得を促した。

コスモスの生活単元学習では体験を通してその様子を言葉で表現する活動をしたことで、より生きた言葉として子どもたちが語彙を獲得することができた。

ｃ）「書くこと」の領域、日常での日記や作文、スピーチ等での学習場面の設定

各学年、作文やスピーチなど、得た語句を活用する機会を各学年で設定した。１年生は「朝のスピーチ」、６年生は「ペアトーク」で話す機会を設定した。

＜単発での取組＞

ｄ）詩の活用

詩の単元で言葉を穴抜きにすることで、児童はただ読むだけでなく詩の情景を思い浮かべたり、実際に詩に使われた語句と予想した語句が違っている理由を自分なりに想像したりして詩を読み味わうことができていた。

③主体的な学び

今年度「主体的な学び」という言葉を掲げ、各学年、「主体的に学ぶ子どもの姿」を考え、取組を行った。学習計画の立て方、教師が教える場面と児童同士で学び合う場面との組み立て方、ふり返り活動の充実について授業実践し、検証してきた。児童同士が主体的に学ぶための仕掛けや次の授業につながる問いへの意識付けなどに取り組んだ。その結果、教師が一方的に教える授業ばかりではなく、児童が主体となって取り組める授業を行うことできた場面もあった。

しかし、「主体的な学び」「主体的な子どもの姿」について教師同士、共通理解が図れていなかったため、各学年の取組に統一感がなくばらつきがみられた

a)自分たちらしい学び

学習指導要領の指導項目からつけたい力を明確にし,教材の特性を生かした単元のゴールを教師が設定したり、学習計画を児童と共に考えたりした。３段階の到達目標を示したポートフォリオの中から、児童自身に目指すレベルを選択させた。また、個別最適な学びを実現させるために探求学習のプロセスを示した。すべての学習計画を教師と児童で共に考えることは困難な面もあったが、共に学習計画を立てるという意識を高めるために、児童の疑問や感想を取り上げた。児童の疑問や感想を授業で取り上げることで、児童自身に学習を主体的に進めていく意識を持たせることができた。

当初は系統立てて、児童と共に学習計画を立てていくことが望ましいと考えていたが、どの学年でも教師が学習計画を明確に提示することで、児童が学習に取り組みやすい姿もみられた。これから教師が学習計画を提示する場面と児童自身が考えて学習したり、選択したりする場面を区別して考え、取り組んでいくことが必要になってくる。

b)子ども同士の学び

主体的な子ども同士の学びとして、話し合い活動をより活発にしていくための取組を行った。話し合いの仕方を学び、友達の意見を聞き質問力を高めていった。これまでの話し合い活動は、ワークシートを回し合うだけになってしまったり、自分の意見を順番に発表するだけの時間になってしまったりすることが多かった。一人ひとりが自分の考えを発表した後に、主張をより説得力のあるものにし、また周りの児童にも主張をより理解してもらうために、児童同士で必ず一人一回は質疑応答をし合い、児童同士の話し合いをより活発にすることができた。話し合いを中心とした授業展開は他教科でも活用できると考える。

c)「疑問（なぜ)」から生まれる学び

毎時間の学習を通して、児童自身が自分の学びの質と内容を自覚できるようにすることを大切にしていくためにふり返り活動を充実させた。単元を通したふり返りや単元ゴールと結びつけてのふり返りを大切にすることで、次の学習への意欲につなげたり、児童のふり返りから授業をスタートしたりすることができた。また、ふり返りをＩＣＴ使って共有することで児童同士の学びに活用することができた。

４ 基礎学力の定着

①読書活動の充実

語彙を豊かにするためには、読書は基礎であり、欠かせない活動の一つである。以下の目標を設定し、図書館運営にあたった。

・本に触れる機会を増やし，学校・家庭での読書習慣をつける。
・学びのツールとして活用する力をつける。

朝の読書

週２回（月・水）の朝学習で読書に取り組んだ。この時間に学級で図書ギャラリーに行き、借り換えを行う学級もあったことが、図書の貸し出し冊数増加につながった。

読書記録カード

自分が借りた本を記録し、学期末ごとにふり返りを行った。１年生から６年生まで継続して行うことで、自分の読書活動の成長を感じられる。子どもの中からは「１学期は〇〇の本が多かったけど、２学期は△△も読んだよ」などの声があった。

読み聞かせ

月１回、朝の読書の時間に、図書ボランティアさんによる読み聞かせを行った。普段とは違う大人が読むことで、高学年も絵本の世界を楽しんでいた。

親子読書（ファミリー読書）

１学期と２学期の２回実施した。「定期的に実施することで、家庭で読書する習慣づけにつながる」と保護者からの感想や声があった。

図書ビンゴ

１１月に実施。普段読んでいる本のほかの分類にも目を向けるきっかけづくりにできた。１列ビンゴをした児童は３６０名以上、全マスクリアは９４名と盛況だった。

先生おすすめの本

１月に行った「先生おすすめの本」のコーナー展示では、教員によるおすすめの本を写真とコメント入りで展示した。普段図書館にあまり来ない児童たちも、コメントを読んでいる姿が見られた。（廊下に併設されている図書ギャラリーの利点を感じた）

読書ゆうびん

２月に、全校で読書ゆうびんに取り組んだ。学級の友達や異学年・異学級の友達とも本の内容紹介を通して交流することができた。

図書ボランティア・図書巡回指導員との連携

図書ビンゴの景品（しおり）作成や掲示物の作成、読み聞かせ・図書おみくじなど、ボランティアの方にお世話になった。多くの方の協力のおかげで、子どもたちも興味を持って図書ギャラリーを訪れていた。

また、今年度は図書館巡回指導員の来校日が増えたため、例年よりも多くの活動を行うことができた。

教科と連携した並行読書

国語科を中心に、総合的学習や生活科・社会科、その他の教科において図書館を利用し調べ学習をしたり紹介文を書いたりする活動や単元学習との並行読書を行った。学級の中には、ビブリオバトルに取り組んだ学級もあった。

（取り組んだ単元の一例）

教材の導入：「つぼみ」何の花でしょうクイズ（１年国語）

調べ学習：「うみのかくれんぼ」「じどう車くらべ」「どうぶつの赤ちゃん」（１年国語）
「むかしあそび」（１年生活）　「せかいのこどもたち」（１年道徳）
「せかいでひとつ　わたしのおもちゃ」（２年生活）
「おもちゃの作り方をせつめいしよう」（２年国語）
「どうぶつ園のじゅうい」「ロボット」（２年国語）
「工芸品のみりょくを伝えよう」（４年国語）
「国際　衣食住」（５年総合）「世界遺産　日本の建物」（５年図工）

並行読書：「たぬきの糸車」「むかしばなしをよもう」（１年国語）
「お気に入りの本をしょうかいしよう」（２年国語）
「くらしの中につたわる願い」（４年国語）　「伝記」（５年国語）
「詩を楽しもう（味見読書・ブックトーク）」（コスモス）

読書感想画：「こんもりくん」（１年）「うさぎをつくろう」（２年）
「アチケと天のじゃがいも畑」（３年）「にじいろのさかな」（４年）
「大造じいさんとガン」（５年）

②家庭学習の取組

宿題については、授業の内容に結びついた課題（主に国語・算数）と音読を各学年・学級に応じて取り組んだ。音読に関しては、目的意識をもって取り組めるように、クラスルームや

オクリンクを使った動画の提出や、読む視点を意識した読み方など、学年の実態に応じて取組を行った。また、「家庭学習の手引き」を保護者に配布し、家庭学習の意義や家庭での取り組ませ方、時間の目安等を保護者に周知することで、学校と保護者が一体となった基礎学力の定着の取組を推進した。同時に自主学習のめあてや約束、内容の例を載せることで、学年に応じた自主学習の取り組み方について提示し、自ら課題を設定し、自主的に学習を進める力を育んだ。

５月と１１月には、家庭学習強化週間を設定し、落ち着いて家庭学習を行う習慣の定着を目指した。強化週間中は、「家庭学習の記録」を使用し、家庭学習に対する児童の意識付けを行った。また、強化週間中の水曜日をノーメディアデーに設定し、スマホ・ゲームをする時間の目標を児童自らが決めて、自制心の育成に取り組んだ。１１月のノーメディアデーは、同時に自主学デーとしての取組を行い、普段取り組んでいる宿題を学校から出さない代わりに、１年生～６年生まで学校全体で自主学習に取り組んだ。２月には、継続して自主的に学習に取り組める力、自己調整能力の育成を目指して、「自主学ビンゴ」の取組を行った。子どもたちが自ら自主学習の計画を立て、課題を選択して取り組めるような形式にし、実施後に自分でふり返りを行って、より自分に合った課題を知ることができるようにした。

③朝学習の取組

今年度、朝学習の取組としてモジュール学習を利用したよむＹＯＭＵワークシートの活用と「〇〇の言葉の宝箱」「言い換え図鑑」の作成を実施した。（後者については、３ 具体的な取組 ②語彙や表現の獲得で記載済み）

今年度の読むＹＯＭＵワークシートは、前期１５回、後期１５回で合わせて３０回実施する予定であったが、どの学年もその回数を達成することはできなかった。しかし、どの学年も計画的に実施したことで以下のような効果を得られた。

低学年の視写については、文をまとまりで捉えられるようになった。そして、それを文章に表すことができるようになった児童も多くなった。また、１マスあけるや改行するなど、これから多くの文章を書くときに必要な知識・技能を身につけることができた。

中学年のワークシートについては、「文章を早く読めるようになった」、「文章で大切なところが少しずつわかるようになってきた」、などの取組の効果を感じることができた。３年生が取り組み始めたころは、１枚のワークシートを終えるのに１５分では終わらず、１時間目にかかることが何回もあったが、回数を重ねるにつれ、１０分程度で終え、その後の解説に時間を使うことができたるようになったなど、繰り返し取り組んでいくことが大切であることが分かった。

高学年の読むＹＯＭＵワークシートについては、思考力を養うことを目標とし、取組を進めた。今話題になっている情報を題材にしてあることも多く、意欲的に取り組むことができた。回数を重ねていくと、読み方、解き方、考え方などに慣れ始め、素早く解答していく児童も多くいた。答え合わせの時には、教師は、問題文と本文のどこが関連しているのか、どの言葉が必要なのかなど解き方の指導に重きを置いた。家庭学習で取り組ませると記事の内容をより詳しく解説する児童いた。

最後に、「今よりももっと多くの言葉を知り、使えるようになりたい」という後期国語アンケートの結果で「とてもなりたい」「できればなりたい」と回答した児童は８０％以上であった。そのようなことを思っている児童のためにも、読むＹＯＭＵワークシートでさまざまな文章を読み、たくさんの言葉を知り、日常からその言葉を使えるように今後も読むＹＯＭＵワークシートを活用していきたい。

④がんばっ１０の取組

取組期間として１週間、１学期・２学期に２回、３学期に１回、学期初めと中間で年間を通して５回実施した。学期ごとに重点項目を設け、児童への学習規律の意識付けを行った。各学年・各学級で取り組み方を工夫し、年度末の結果として１０項目のうち８項目で年度初めに比べ達成率が向上した。あくまで児童の自己申告ではあるが、本校での長年の取組であり、学習規律の定着につながっている。

５ その他

４月の学力学習状況調査の後、全職員が問題を解いて調査の内容を把握し、その後、研修部で算数と国語のグループに分かれて調査結果の分析を行った。そして、校内の全体研修会で分析から見えてきた本校の学力の強みや弱み、そこから見られる各学年の課題、弱みの改善に向けた各学年での取組などの共通理解を図った。分析結果の概要は、以下の通り。

平均正答率については、国語（６８・全国６７．７）算数（７９・全国７０．２）であり、ともに全国値を上回った。また、国語・算数ともに全国値よりもＣ層・Ｄ層の割合は少なかった。特に算数は、昨年度に比べ大幅に改善された。しかし、国語は０．８ポイント増加した。

国語では、「書くこと」の領域や記述式の問題の正答率が低く、「読むこと」の領域における無回答率が高かった。それぞれ「目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」「人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする」ことができるかどうかをみる問題に課題が見られた。算数では、問題文の読み違いによる誤答が多く、「球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表す」ことができるかどうかの問題が大きく全国値を下回り、課題が見られた。

児童質問紙からは、平日に１時間以上勉強する割合が全国値よりも５．１ポイント下回った。昨年度よりも５．６ポイント下がっており、土日に関しては、さらに数値が低いことから家庭学習の定着が十分に図られていないことがわかる。

指導にあたっては、各学年での取組を考え、以下のような意見が出された。児童の課題に対して職員が共通理解を図り、系統立てて指導にあたっていきたい。

【１年】・「きもちのことば」カードを使って、語彙の育成と活用を行う。
・体験・経験を言葉で表す活動を取り入れる。
・題名や文章内の言葉、挿絵などから情景や登場人物などの気持ちを想像する経験を積ませる。
・子どもの疑問から出発して、授業構成を考える。

【２年】・国語に対して、肯定的な意見が多いので維持できるよう授業づくりをしていく。
・伝え合うための言葉（教科書（下）巻末）を活用し、自分の立場を明らかにして要点を絞って話すよう指導していく。
・わからない言葉に出会うのが「先生の話」「漢字ドリル」というアンケート結果から意味をきちんと伝えること、使っていくことを意識させる。

【３年】・子どもが中心（主体性）→ 他教科への広がりの授業を４単元で実践する。

【４年】・複線型の授業を取り入れていく。
・授業の中で活用する場面を作っていく。
・言い換え図鑑の作成を行う。

【５年】・言い換え図鑑の作成を行う。
・子どもの問いから授業を考える。
・ＩＣＴの振り返りを行う。

【６年】・話す機会の充実。活動の中でさまざまな言葉に触れ、実際に使う。
・言い換え図鑑の作成を行う。
・自分で考え創造する授業、教師の出番を減らす授業づくり。

同様に、三重スタディチェックについても全職員で採点を行い、結果の分析から強みと弱みを把握し、授業改善に活かした。また、独自に作成した国語科に関する児童アンケートを、２年生～６年生で６月と２月に実施し、指導に役立てたり、研究に活用したりした。

６　来年度に向けて

本校では、今年度で国語科の研究・研修を進めて２年目となり、改めて今後に向けての課題を見出すことができた。まず、冒頭でも述べたように児童が自分の言葉で思いや考えを適切に表現し、豊かに伝え合えるといった力には、まだまだ個人差が見られ課題が見られる。これらの力は、決して短期間で身に付くものではない。本校児童全体のレベルアップを目指して引き続き、来年度も国語科を中心に研究・研修を進めていく。

そこで、今後は、今年度進めてきた３つの柱の一つ「主体的な学び」に焦点をあて、学習指導要領に示されている「主体的で対話的で深い学び」を追求していくための具体的な方策を模索し実践していきたい。そのために、今年度の課題から学習指導要領に基づき、本校における「主体的に学ぶ子どもの姿」について、全教員で話し合い、明確にした上でその姿の共通理解を図ることからはじめていきたい。また、研究主題である国語科での学びが「生きて働く言葉の力」として活用されるには、今後、それぞれの児童の課題を明らかにし、活用の場を随所に作っていくために校内で統一した取組や、各学年に応じた取組などを年度初めに設定し、年間を通して取り組んでいく。さらには、研修部の組織体制を整え、低中高における学びの系統性を整理し、段階的な研究・研修を進めていきたい。

最後に、教員自身も「主体的な学び」が実感できるよう教員一人ひとりが自分ごととして取り組み、「学ぶことが楽しい！」と感じられる研究・研修を目指していきたいと考える。